

お花見する前に
桜が散っちゃったよ～
のんちゃん、
かみちゃんです。



のがみ通信

2025年5月号・NO.181



お米作りの今昔

5月となり、いよいよ田植えが本格的に始まりました。水がはられた田んぼに、小さい苗たちが春風に負けじと一生懸命に根を張ろうとする姿は、見ていて元気が湧いてきます。

昔は苗を3～4本とり、一株一株植えていく手作業が中心でしたので、腰をかがめてばかりの重労働でした。多くの人手が必要となるため地域の祭事としてコミュニティを形成する役割も担っており、子どもたちも手伝いに駆り出され、農家の多い町の学校では、昭和中期頃まで『田植え休み』を設けるほどでした。編集者も農家の生まれでしたので、田植えの時期になると『手伝いのため休ませます。』と、親が学校に連絡をしていました。(時代は平成でしたので、そのような生徒は私だけでしたが…)現代では田植え機の普及により、以前の5～6倍以上もの作業時間短縮につながっています。

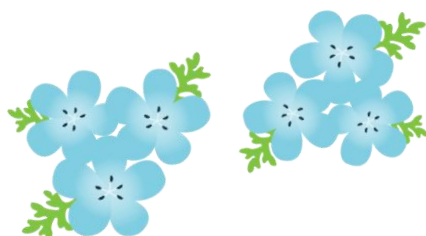
また田植えが終わった後も、毎朝・晩の水管理は怠れません。水量が多すぎても少なすぎても生育に影響を及ぼすため、田んぼを巡回し、人の手で水量を調節することは一日も欠かせない大変な作業でした。現代ではコンピュータ制御による精密な水量管理が可能となり、スマートフォンを利用して遠隔でも水量調整ができる装置の開発など、AIやITシステムの進化により生産者様の負担軽減に役立っています。

このように昔と比べると機械化の普及やシステムの進化によって、お米作りの作業効率は格段にアップしています。しかしながら、近年は異常気象による生育不良や、国の減反政策、後継者

不足による生産者様の減少などの要因が、令和の米騒動を招いています。日本の主食『お米』が、どの家庭でも安心しておいしく食べられる。そんな日本を守り続けていきたいと想いながら、米どころ新潟で野上米穀は今日も頑張って参ります。



Happy Mother's Day



(株)野上米穀

〒940-0087

新潟県長岡市千手2-10-20

TEL:0120-058-041

FAX:0258-84-7738

E-mail:kome@nogami-kome.jp